

2023年3月に、5年ぶりの来日ツアーを予定するレ・ヴァン・フランセ。ツアーに先駆け、メンバーの一人、ポール・メイエ（クラリネット）にインタビューを行いました。

Q こんにちは、メイエさん。2020年にはコロナ禍でレ・ヴァン・フランセのツアーが中止になってしまいましたが、今回ついに日本に来ていただきます。

本当に嬉しいです。この時をずっと待っていました。ついに日本に行けるんです！

Q まず、今回の演目に関して質問です。エリック・タンギー氏の新作について、お話を聞かせてください。

はい。実はこの曲はまだ聴衆の前で演奏していないので、メンバー以外まだ誰も聴いたことがないのですよ。エリック・タンギー氏の作品は現代作品ですが、難解ではありません。どちらかと言うとクラシック寄りです。きっと聴衆の皆さんは「この曲は好きだな。」と感じてくださるはずですよ。ひと口に「現代音楽」と言っても、いろいろなスタイルがあります。タンギー氏の新作は「新様式のコンテンポラリー」だと思います。それ以前の現代音楽とは、作曲様式に変化が感じられますね。

実は私は、音楽院時代から常に現代音楽に触れてきていて、タンギー氏だけでなく、ピエール・ブーレーズ、オリヴィエ・メシアンなど様々なスタイルに馴染んでいます。

Q 作曲は、レ・ヴァン・フランセがタンギー氏に創作を依頼しましたか？

はい。発案者はピアノのエリック・ル・サーージュです。他のメンバーも全員、エリック・タンギーのことは何年も前から知っていました。フルートのエマニュエル・パユも彼と親交が深かったですし。私も彼の作品を演奏したことがありました。

日本でも、酒井健治さんに新作をお願いしたことがありますが、メンバーがすでに作曲家と交流があると自然に、曲をお願いする流れになります。作曲家のほうにも「このメンバーにはこんな曲がいいのではないかな。」とすでにイメージが湧いていることが多いのです。

ただ、初演がレ・ヴァン・フランセによるものであっても、その後楽曲が評価されて、多くの演奏家が関心を持って演奏してくれることが、とても大切な目的です！

Q ツアーの演目を決める際に、基準にすることは？

まずは「演奏したい！」と感じる曲を選んでいます。そのうえで、考慮すべきことを考えます。例えば、演奏時間の長短。聴衆がいま、それを聴きたいのかどうか。主催者からのアドバイスにも耳を傾けますよ。でもやはりいつでも、その曲を演奏したい、誰かに聴いてもらいたい、そういう思いこそが、最も確かな基準です。

Q レ・ヴァン・フランセのメンバーは、それぞれの楽器でいわば「フランス音楽のスペシャリスト」です。フランスの音楽の魅力、特色とは？

色彩感が溢れていることでしょうか。フランス音楽の最大の特徴と言える点は「健やかにユーモラス」であることかな。感情や感覚の繊細な表現に溢れています。でもその感情は、豊かでありながらも、ストレートに強く押し出されるわけではないのです。

例えばドイツ・ロマン派の音楽、ロシア音楽には、魂の苦悩の表現が大事な要素ですけれども、フランス人がそれを表す場合は、あえて「ちょっと抑え気味」ですよ。

そういった意味で、フランスと日本は近いところがあると思っています。フランスには若干の「引き」、謙虚さのような、そういう個性があります。見方によっては「礼儀」とか「愛嬌」でもある。そこが「味」です。

Q 次の質問は、レ・ヴァン・フランセの活動についてです。室内楽という分野で20年以上も活動を継続するという、その成功の鍵は？

鍵はいくつかあります。大きな熱意で臨んでいる事に加えて、どの楽器にも最高の演奏者が集まっていること。

そのそれぞれが、ソロ活動や、独自の音楽活動をしています。

レ・ヴァン・フランセで集う時、それぞれが、他の場所で培った新しい体験を持ってくるのです。それをまた、全員が分かち合う。分かち合うためにまた集まる、と言っても良いくらい。

ここで鍵は何かというと、そんな混合部隊をどうすれば上手にまとめられるかということ。メンバーがその都度持ち寄ってできるもの、それは膨大で素晴らしい経験の塊なのです。

ただ定期的集まって、いつもの演目を繰り返すという平坦な活動ではなくて、私たちは常に新しさを求めたいのです。一緒に仕事したい、お互いを尊敬して「すごいじゃないか！」と新鮮な心で言い合いたい。究極の成功の「鍵」は、そこかも知れません。

仕事の間で仲間への尊敬、優れた成果や過程への感嘆を表すことは、とても大事です。

さらに、もっと基本的なことは友情。レ・ヴァン・フランセのメンバーはみな、私にとってはもはや仕事仲間を超えて友人です。とても長い付き合いになりましたね。

Q 木管五重奏の場合、それぞれの演奏者や楽器に、特徴的な役割はありますか？

まず楽器として考えれば、フルートには鋭い高い音を出す、という役割があります。オーボエも高めでクラリネットほど低い音域までは下がらず、音で言えば単純に高低差での役割があります。ホルンは音の響きそのものが違いますよね。木管アンサンブルの場合、忘れてはならないのは、楽器が同じファミリーでも、個性が違うということ。それぞれに色合いが違います。

声楽曲に例えると、男声のバス、バリトン、テノールがあって、女声のアルト、ソプラノがあってこそ、音楽の全体が成り立っていますよね。木管アンサンブルの楽器の音も「音」なのではなくて、「声」と思って聴いてくださいね。

Q 室内楽のレパートリーに詳しくない人がコンサートに来る場合、もし事前に何かアドバイスをするとしたら？

室内楽の良さ、つまり、大規模なオーケストラの場合と異なる点は、ひとつひとつの楽器の「声」が際立ってつかみやすいことです。楽器と楽器が対話をしている音楽、と言ってもいい。声のやりとり。問いかけて、応えている音楽です。

Q プロの音楽家を目指す若い演奏家に、一番大事なアドバイスを送るとしたら？

ああ、その答えは簡単で、ひとつです：「たくさん練習してください。」

私も、いつも自分にそう言っています。練習は欠かしませんし、あきらめません。これで良いかな、と思った後に、また繰り返します。何度でも、いつまでも。そして、毎日。

Q この3年間のパンデミックで、どんな苦労がありましたか？

まず日々の社会生活そのものに、どういいう見通しを立てたらいいのかわからなくなり、パニックになりました。文化的な催事も音楽のコンサートも禁止。私だけではありません、全ての人たちにとってきわめて困難な期間だったでしょう。若い世代にとってはさらに大変だっただろうと。コンサートができない、当然収入が途絶える。演奏家のみならず、企画を主催する皆さんにとって、試練だったと思います。

Q 最後の質問です。メンバー全員が多忙な中で、レ・ヴァン・フランセがコンスタントに演奏レベルをキープし、常に高評価を得ていることは、大変な功績です。レベルとリズムを保つための心意気は、どこから生まれるものですか？

「満足しない」ことでしょうか。もっと上手に演奏したい、より良い音があるはずだ、と信じるのです。それによって、上達できるのです。永遠に。

仕事を続けることで、自分はより強くなれる。良い結果が生まれる。それを見たい、欲しい、と思うこと。

「止まらない。続ける。」というのは、私にとって生きることそのものです。

私はいまだに「ああ、到達できた。」と感じられません。どんなに練習しても、演奏しても、まだ学生なのです。勉強するぞ、もっと演奏するぞ！と。そうすることで、コンスタントに上達していきます。それが喜びです。

とてもシンプルなことです。

また健康は、すべての基本です。音楽家に限らず、全ての人にとって。自分が健康であることについて、なんて素晴らしいのだろう、と感謝しています。人生の大きな幸運です。健康であればこそ、心が自然と「もっと良く生きよう、仕事をしよう。」と欲するものです。

生きることは喜びに満ちています。「アンサンブル」というフランス語は「一緒に」という意味です。集い、一緒に過ごす喜び。仲間たちと、聴衆の方々と再会する喜び。いつか行った土地にまた足を運ぶ喜び、日本に行く喜び・・・そして音楽の喜び。

小さな子供の心で、穢れのない新鮮な目で、世界を発見したいです。演奏した曲の他に、自分のまだ知らないどのような曲が、世界にあるのだろうか？ どんな音楽家にこれから出会えるのだろうか？

自身が選んだ大好きな職業、「音楽」が、すべての発見をもたらしてくれます。そしてそんな発見をずっとつなげていきたい。私の心の奥の想いです。

今日までまだ、ただの一度も、「これでもう、この曲はやり切った、すっかり理解した、だからもうお終いにしよう。」と思ったことはありません。もっとできそうだと！思うのです。

Q その思いこそが、ひとつの才能なのでは？

PM そうかもしれません！そしてそれは、「才能」であると同時に「幸運」なのだ、と申し上げます。